



近世說美少年錄

六編
三



^ 13
3567
28



門 13
號 3567
卷 28

新編 石童子訓卷之十三

東都 曲亭王人口授編次



三同

深夜小盜を捕へて賢郎家寶を全と
闇刀玉を碎きて老賊創て懺悔を

その時末朱之ぬへ呼ぶ隨小奥よりゆける其人の宿六あるをまご見も
知らぬ社伎あるれが訝りぬ我を入りて和郎は何人あるを宿六雙の在るを
やと問ふ社伎然りとよ小父の前月節供の比三池邨へより去りぬ何等の
所用欲知らぬも今日の間あひひがすり我上の豫より小父ふばれりも
あへん。這里ある故の家あり。留守七の獨子ある。盆九郎即是と和君の
小父宿六の話説ゆ。知りたり。卒先這方へ我まをぬとの小朱之ぬ
あるゆ。我も亦其名を知り盆九哥々ありけるよ許しぬと肩より下を

石童子訓卷十三

文藝堂藏

早稲田大學図書館
昭 34 6. 3 雙
藏 書

襖裏と酒樽を。を。其頭小閣にて地炕の邊に坐を占む。盆九郎ハ埋
火を撥起しつ。扱ひのや。偶來まき。珍客なる小宿六を在り。と。代り
て此の款待を必し。に。該るれども。つ。せん。恥をり。ね。理。も。や。え。と。世の
常言ハ。宜。る。哉。親。留。守。七。の。病。中。より。幸。貢。の。未。進。村。の。借。財。せん。術
の。あ。り。隨。ふ。我。身。の。久。く。夫。役。の。参。り。て。城。内。の。在。り。を。僅。小。糧。を。賜。る。の。と。
酒。も。の。飲。む。寒。天。の。夾。衣。一。領。心。漂。塩。草。播。集。め。の。亦。畧。と。聞。錢。境。の。造
化。多。く。西。へ。東。へ。身。の。振。が。こ。ま。一。霎。時。暇。を。あ。り。て。久。り。來。ぬ。と。又。借。財。の
債。ら。して。術。の。さ。ふ。村。長。刀。徐。小。振。向。け。て。今。日。這。家。を。賣。渡。さ。し。く。我。有。り。て
我。有。り。ぬ。這。里。の。寝。も。今。宵。の。も。明。日。の。又。城。内。へ。久。り。参。り。て。夫。役。部。屋。の。厄
會。の。あ。り。と。思。へ。今。朝。より。氣。を。腐。り。て。眩。を。枕。抱。火。盤。炭。團。と。共。小。瘦
る。ま。で。現。不。苦。の。絶。ぬ。世。と。と。呻。言。が。う。り。身。上。話。の。朱。之。奴。も。嗟。歎。し。く。

開の妙ありぬるあり。我も亦宿六の知られ如く。彼拘神の一義
より。絶て久し。母刀自と今の阿爺小環會て。開が儘同居あるれども。と
の。ひ。つ。外。面。見。え。り。て。を。日。暮。る。ん。最。寒。く。有。斯。ふ。と。知。ら。ぬ。と。齋
の。酒。茲。ふ。あり。夜。食。代。り。酌。替。て。夜。と。共。小。話。ま。し。是。温。め。を。や。と。拿。抗
て。此。を。件。の。酒。樽。酒。菜。を。盆。九。郎。見。つ。合。笑。て。又。逆。る。御。造。作。り。て。反。て。痛。ま
煎。鍋。も。炯。鍋。も。皆。售。竭。て。酒。盃。も。あ。る。と。り。か。ど。貧。乏。堪。へ。身。を。離。れ
む。輾。轉。て。御。坐。を。是。處。の。酒。樽。の。酒。移。し。て。尻。を。焼。て。ん。と。ち。戲。と。り。て。變。る。
蒼。柴。地。炕。の。折。焼。に。て。稍。暖。る。塩。酒。茶。碗。一。箇。を。敗。折。敷。小。酒。菜。も。載。り
竹。の。皮。松。の。皮。の。抄。箸。添。て。送。小。酌。を。と。り。膳。小。彼。一。椀。我。一。椀。献。し。身
え。ろ。手。袂。より。を。喜。め。ぬ。と。桐。火。燭。し。て。四。下。を。光。ら。せ。夜。酒。醺。盆。九。郎。の。身
を。起。し。て。門。の。戸。引。て。坐。お。ろ。す。主。客。送。小。薄。醉。の。舌。さ。く。廻。る。朱。之。奴。の。溢。り

まふ飾せらる。茶碗の酒を一口飲ん又金九郎小向ひていふ。多辯の要らぬ
 る。我上を今詳ふ盡さん。我阿懐の骨肉の恩愛
 ろ。客扱ひあせむ。阿命ハ素是贖物。親類。彼
 百金を久くあるま。竟小遠與さ。刺往比城内。之。折我怒
 て落馬。腰の骨を折。阿爺ハそれを科。疾死ね。と
 の。只難面。怒。親。勝
 四五日前より稍瘡り。百里の路も
 阿懐ハ談。拘神の百両金を
 受取。婦人の浅。阿爺と肩を比。手實を引
 裂棄。腹。敵手ハ親。婦人。甲斐
 者。阿容々々と告別。那里を立。今日亭午の時候

あり。非如手實を破ら。宿六ハ人證人。俱小國守。百
 両金を取。已んと思。今來。途。又克念。亦迂遠
 由。開。優。手短。王張。初對面
 和主。這肝胆を吐。とい。金九郎眼を睜。亦聞
 る。我小父。宿六。老。彼。あ。任。猶子
 の如。錢。和君の資助。と。わ。照
 据。疑。思。要。奥。敗。扇箱を
 來。開。儘。朱。示。我家祖傳の什物あり。是を質。と
 和君。預。先見。と。拿出。朱。受取。燈下。熟視。柄
 附。刀子。青海波の三字銘あり。小柄。則。全。白金。波濤。知鳥の高彫
 あり。朱。冷。笑。盆。九。然。胡。詐。を。盡。世。稀。名。刀。ふ

假令先祖傳來ありとも。貧農の和主等が。今も心藏り置ぐるもあらずに必別
 來歴あるん。隠匿を告ぐ甚麼ぞや。いふとと詰り。金九郎困ると頭を擡て亦
 見られて脱る路あり。其刀子のいねる比咄等々のあつて開を詳説し時
 彼城内にて試撃の折咄等々茶番の夫役にて西ある集會所不在。其日
 大江と歎い少年の中刀附する這小柄の錢あるづく思ひかへ久しく
 隙を窺ひし彼人腰に放さるる手を下をりしるりし。小畫餉の割筆を
 披き折りのある者即是とあれども強く是を售べ立地人不知りて事
 の破さふありやせんと思ふの故に秘置しを今拿知て和君の見を。赤心
 を知らせんといふ外なる漏しありと真術立て叫くを朱之介の又冷笑ひ
 魂の見どころあれども開の只刀子細工也我片腕に負む不足らば先も是を
 斂めよといひつ投返を刀子を金九郎の本意をいふ扇箱に藏めても治り

かた口の各漫ありたと喚け朱之介の笑ひて否今の言の戯れとのそ。
 然らば我計較の奥の院をうち開ん欽耳をむと曳よせと。今取らひ
 つ如く敵手あるる阿翁の各蓄血を分らるる阿懐を。形の如くの造化
 あり左ても右ても商量盡す。拘神の價百兩金を渡さる。更其のを所詮
 今宵潜入りて阿翁の金銀の有涯り。擡攫ひて走るとも。親の物の子の物と
 竊むふ似て盗むふあり。差引出入過不及の算帳を消さるとん。是
 等のふら我身單也。故にたふあはねども。いさ飽を思ふよりあり。阿
 翁が養老種ふとて愛する一箇の螟蛉女の。其名を晚縮と喚。故に年々二八
 十二分の縹致這頭ふ稀あると。我又其奴小怨あり。元自の腐骨打序次ふ
 宿鳥の晚縮を擡執して京欽浪華。將てゆたて娼妓小售る。五六十金の身
 價の易りてん。あの義を和郎小頼むあり。今宵阿翁入或病架の床徹ふと

招き酒を煮て談ふれど久き必真夜中過ん子一刻の時候我と和主と
 那里小田に窺ふて我の背門より潜入りて阿爺が納戸の秘措ゆる款冬花を
 りの志ん和主の前門の頭より竹橋を乗て裡面入りて先脱路を啓く下り而
 して金関の潜入り其次の中間又其次の出居の間を左りの庵福右の納戸より
 晩箱の臥簾へ納戸あり和郎の咄等小斟酌せ晩箱の蚤く布囊を
 袖せて肩擔せぬり。お合ふ地方の圓通河原の材木の蔭ゆえ俟ん和主
 とく其首ゆ等ね辛苦錢の等分よとせり。と叫々言詳小説示金盆
 九郎の幾回とく。領たるが合笑てその最妙とあるゆり初更を過くと這
 里をゆる子子の時候必那里追らん又喫下りと地炕る堀見をやを
 掖せし見て噫鈍や無敷なる長談小心引きて絶ふ残る一壺を煎酒小こを
 うる多れといひく自酌小茶碗小受て吹らす三口小喫乾して卒とて獻せ給朱

の亦も與小乗して又一霎時俱小醉を盡しけ。現同病相憐を同と氣
 相求めゆる友人の一面小く故舊の如く堯を吹ゆる盗跡の犬自物あり
 身の好友を送小知るや白布の積鼻禪の端を頭をきまふ酒小寒々苦
 を志草心の鬼の醜草も冬枯れぬり長夜夜の遠寺の鐘小深初て既
 小時分ありしと朱之小の盆九郎をのぞき立て出まくを當下盆九の身を起
 して身整して且の盆を我身小寸鍊ありせ萬小一人不知らして逐るゆのあ
 らん時何をもち敵小當らん撮小るれも物ある青海波の刀子茲小あり是
 究竟と拿抗て折敷小残る竹の皮を三折小巻て鞋小巻の彼刀子を懐小楚
 と扱めて立出まふ朱之小の旅中刀を腰小帯つ袂包を引提てのそ夜路
 賊一寒に望望月の影明けよ惑ひもを圓通河原を過る時朱之小の
 菅笠と袂包を其頭より建し材木の蔭小隠れを見ゆる盆九の歩を駐

りて大哥さき取る為欵といふ間ふ朱之女の走り就つ去向の首尾を
 謀り合はせり程小夜の子の初刻といふに時候吾足の門小來ふけれ
 朱之女へ相別せ背門より潛入らるるを當下盆九郎ハ離色を棄内小
 入りて先前門の摺戸の鎖を外し戸を密と閉て脱路小便りしるる又
 女中の戸を外して納戸を投てを潛入る。その夜吾足齋の宿好多阿夏の老
 学ハ晚猶と共小良人の之を俟けふ既小女中の過とも門の戸敲く音
 もせられ晩猶ハ遂小允されて納戸小入りて批小就は老学ハ獨細ちる燈
 下を掲げり。單物の本を讀見て在りし更も隨小寒氣小堪れハ置炬
 燒小大火桶ある火を拿移る浦團を被て寢るとありし脚踏入るる
 横臥しより程もろくを儘熟睡ありし前後の門より盜見の入るを
 憂ふも知らざりけり。余程小朱之女の案内ある上るれば吾足が家の裏

手より板塀を棄松を傳ふて庭小閃りと下立て左右して擔廊ある戸を
 一枚推開て納戸へ潛入る程小盆九郎も亦茲小來つ晚猶ハ枕の頭を圓行
 燈の火光を面を對して領くのを朱之女ハ今撈らるるを控木戸架の
 鎖固ければ盆九郎も手傳ふて力を勤して採断捨る小晚猶ハ方僅睡端
 めて且幸少ければ嗜睡を朱之女ハ覺るるを。と見たり。指さし示せば盆
 九郎ハらるるに晚猶の夜被を握拿強く登り菟とる勢ハ晚猶ハ忽地驚に
 覺て吐嗟と叫ぶる口一手拭衞る布囊拵れし両手を振りて屏風小掛する
 帯をもて繰々纏ふ最緊し。縮め動くを。開か間小朱之女ハ戸架の
 内なる小簞笥を撈りて奪ふ財囊ハ金二裏の重きあり。かゝるや。と縁上
 り思ひし。と。といふ。是小集るる。暴風馬の雛猴を扱む小異る。盆九郎ハ
 音小泣く。晚猶を小腹小楚と抱に揚て外面投く。時阿夏の老学ハ枕方

ろ。火桶の撲地と駆け上りありける真鍮藥罐の瓦礫と墜て仄々茶
 さ。烟を起て散乱を老亭は是れ驚覺て身を起し金九郎を見つ吐きと
 胆を潰して戦ふも心利たれ墜る藥罐と鑊火着を両手小拿てうら鳴り命を
 涯り聲限り小賊有々と叫ぶ程小合壁ある津向屋の主人はさうと旅客まで事
 ありけりと驚覺て覺て要時ありて成起して庭口は小片折戸を推し敲り入
 るも浩處の吾足齋の彼病架ゆて強られ酒酔ても本性錯るを夜深て
 中や絆きりて單宿所のいど程小謡亭唄る生酔の一步の高く一步の
 低く。只是跟々踏々と辿り着ける已が門を。見まはし樞戸開けあり。訝りる
 が。投り入る女関の戸も亦一枚外される欵寄掛てあれは。心驚か
 かし。開か隨ふら登る程小金九郎の縛膝け。晚箱を小腋小拵抱いて撞見
 見小吾足齋小礮と相値ふ送の驚か前後。退く西二歩吾足。透ささ聲

立ち。盗見まると引提る。小挑燈を衝と刺し。金九郎の面を見られ。左の
 拳を拵りて挑燈撲地と打落さ。闇夜の善悪ある處を實々聞あを。吾足
 齋。技は晃れ。又の雷電金九郎抱いて。晚箱を盾小両手小拵て受留る。
 額舎を撃つ。又の鋭味憐れ。一六の少女の胸の邊を深痕の一刀叫びも
 あぬ。猿鑊の只是巴蜀山峽の腸を断つ鮮血の絳。吾足の人や錯ふけれ。と
 思ふ。躊躇ふ開か。程小金九郎の晚箱を投棄て。懐る刀子を抜く。吾
 足の溝を小柄も徹と。丁と刺し刺して。吾足の苦と。うら。醫居小控と
 仆る。程小金九郎の又を抜取りて。跳越つ。暮地の外面投て。逃去。折る。這
 頭を過る。少年あり。是則別人。も大江杜四郎成勝。今宵も青海波の
 刀子の在處を撈り。知らず。り。さ。峯張栄六郎通能を將て。石見。好純
 と共侶。甲夜より市を涉。獨つ。更闌。くる。路程料。も。吾足の。門を過



吾足齋
 晩稻を刃
 せ

玉石童子訓卷十三

文楽堂藏

る折々門内より突然と出る暴漢あり。右手の刃を執られ、賊のへりと
を中へ猜し去向小立て聲高かつた。よよ留まれとのをも果を金九郎の刀
子を振晃りて走蒐るを四郎の鬨が身を反くと利手を捉へ撲地と
蹴る蹴らして金九郎の刃を捨て筋斗から一文をり。前面に撞と仆り折りも後
を来りぬ染六小杜四郎聲を被て峯張其奴を綁せり。との小染六あり
ゆゑ起んと拵扎金九郎を捕へ壓して動くをも腰に準備の早繩を手繰出
るの痺々と緊しく結扭て推居けり。是時高嶋石見も挑燈の蠟燭を途
小接易て来ふけり。小杜四郎見りて。只今怪しむ暴漢を搦捕する夏の顛
末箇様々と告知りし石見が携へる圓挑燈の光りを借りて。今暴漢
か振捨てる刃を索ねて拿抗見り。小染六疑ふもあはぬ。三十日夜索難
る。青海波の刀子ありけり。小杜四郎の歡び。石見も染六郎

も欣然と一と僕みのみ。原來這奴の前月望の日大江家室の刀子
を竊と取りし賊ある。向せりと知る。死のものと。小杜四郎黙頭て只
其罪あるのさる。這刀子も其奴が衣も鮮血多し塗れ。今憶
ふ今宵竊盜の爲に。這家小潜入りて人小傷する。あはぬ。今今際
しく敲る。何を吐く。強く拷問せよ。との小染六阿と志
て腰の鍔を抜。養れぬ。持懲せ。盆九郎は苦痛不堪。その
身の素生云と具小告て。又いぬ。御推量の如く。其刀子の衆少。手の試
撃の折。已か出来。心を竊取り。すけき。この頭で告り。其王。小早く知
らねる。を怕れて深く秘措。ゆひ。この里の家主人。吾足齋ふ。いり。已か
よ。怨あれば。今宵詣来て。彼人と角口の怒り。小衆。其刀子をりて。痰
を負して。走り去ら。折刀。祢原。撞見。て。搦捕。と。天罰。を

のり。この石見を石見の冷笑ひて大江主の御ひり。今這奴が招了を。野刀子の
 りの實多ぶ。吾足齋のふの信。さうりといふ。朱六の俱の合。伴の吾足齋
 延明の相識。相識ある。彼末朱之の。乾父といふ人の。噂。噂の。今
 宵其門前。他に仇。賊を捕。て青海波の。刀子を。とり復。け。最奇之
 と。いふ。杜四郎。再談。及。む。現。この。盗。見の。片。言。を。詰。り。と。時。を。接。さん。より。
 疾。這。家。呼。門。て。事。実。を。探。る。ふ。ま。く。こ。と。あ。ら。う。と。い。ふ。石。見。も。朱。六。郎。も
 驚。く。と。心。の。俱。盆。九。郎。を。牽。立。て。用。に。て。ある。角。門。より。我。を。入。り。り。
 呼。門。の。奥。の。人。の。聲。の。と。出。迎。る。者。あり。けり。是。より。先。末。朱。之。の。
 晚。猫。を。攫。奪。す。つ。死。る。を。盆。九。郎。任。し。て。見。え。る。と。只。彼。金。子。を。の。せん。と。い。
 辛。く。小。簞。等。の。財。囊。を。撈。り。て。披。出。せ。最。重。の。あり。けり。憶。
 り。を。満。面。笑。を。含。て。搔。批。る。身。を。起。し。程。不。次。の。坐。席。臥。り。けり。

母老。苦。が。睡。眠。覚。て。何。も。あ。ら。ん。う。ち。鳴。り。て。賊。有。々。と。叫。ぶ。あ。と。朱
 之。の。心。慌。て。面。を。見。せ。と。思。い。ど。も。其。頭。を。過。る。あ。ら。ん。庭。の。脱
 路。多。け。れ。只。得。其。次。の。間。へ。歩。を。老。母。の。驚。に。あ。ら。ん。燈。火。の。光。も。看。一。看。て
 開。珠。の。あ。ら。ん。と。喚。ひ。果。を。身。を。起。し。推。留。あ。ら。ん。あ。ら。ん。朱。之。の
 の。心。慌。て。急。如。く。檐。廊。へ。身。を。跳。り。て。走。り。出。て。庭。へ。閃。り。と。飛。下。る。勢。力。劇
 しく。は。と。憶。ひ。を。柱。の。眩。壺。鏡。不。持。財。囊。を。掛。曲。ら。れ。て。忽。の。断。離。れ。て
 手。の。残。り。財。囊。ハ。柱。の。吊。り。て。あ。ら。ん。を。上。屋。り。て。合。さ。る。暇。も。な。く。庭。の。折。戸。を
 蹴。破。り。て。逃。去。せ。る。程。不。隣。家。あり。け。津。向。屋。より。庭。口。傍。ひ。人。多。く。
 這。方。へ。來。ぬ。挑。燈。の。火。光。間。近。く。見。え。し。朱。之。の。度。を。失。ひ。て。進。退。茲。の
 窮。る。の。り。案。内。知。ら。上。あ。ら。ん。庭。の。潤。井。の。身。を。繋。り。て。透。を。は。り。堀。を
 乘。て。速。去。ま。く。思。ふ。の。り。便。を。は。り。けり。介。程。不。津。向。屋。の。老。母。烈

一に喚聲と打鳴を物の響の常あるまゝに小敬馬見て事ありけりと玉も小
 厮も挑燈を引提六尺棒を衝立て裏手供ひ小来ひける程に當晚同宿
 の旅客等も思ひ合はるよりやありけん皆共侶小起出て主人の後小従ふて
 庭門ま心来ひけしと内小入らるるまゝに開か儘樹蔭小立集ひて事の容
 子を知らなくも老亭へ是を知らねども今津向屋等が来ぬるを見て泣聲
 立てやと更立疾来のひね今宵我家の前後の門より両箇の盗見潜入
 て俱小納戸小在り一時箇様々々のるふあり奴家が睡覺一々恐怖忘
 して皆さるを喚集まきせし程小件の一箇の盗見の蝨く外面逃去りぬ又
 一箇の盗見の庭へ走出ればとも既小逃亡けん今影を小見えをありぬ猶心許
 るに小方僅納戸小ぬけて見ると小晚稻の卧筆小在るをありぬ戸架へ鎖を毀れて
 良人の貯禄の金子をどり多く竊と食らとてける欲筆筒の内へまづ入り見

ねども狼籍のへうもあまざり。又只そのまのまを方纒玄関の方當
 りて人の挑む如に音響えし其後のののあまざりぬて見ると思ふとも然
 し物のおそりく胸の騒がれはさう。と告る小驚く津向屋の主人も
 小厮も眼を睜りて開へ安らぬるまゝのこゝろひくも亦挑燈を振照して
 主僕玄関ぬけて見ると思ひひるた吾足齋の深痕を小負ひけん右も小を
 おあがら鮮血塗れて小を在り又其身邊小女児晚稻の帯りて足を拈
 られて胸より腹小刀瘡あり共小生さるもあまざればあはし何れも
 老亭を呼て云と告る小老亭の胸の清き涙の外もさうりもあま
 丈夫と女児の空に骸を抱起し呼活れども甲斐あるまゝあまざれば
 津向屋の主僕を供ひて隨即父女の亡骸を開か儘坐席小昇入れて茶よ
 灸と罵りて俱小抱き折らる外面小ありて幾回とさう呼門を事小

紛々誰も耳ゆへ入らむりける津問屋の主人が箱はつひに訝りながら
小廝を出して其来意を問はる小一霎時ありて三箇の武士一箇の景漢小
重索掛するを牽せり件の小廝を景内ゆりて主人の妻は對面せんとして
馳て奥より来ふけり老母はさき津問屋の主人も其人を知らず心訝
りあらず先上坐ふ席を譲りて又其来意を請問は一箇の武士答てのふら
俺は當国守家の兵頭高嶋石見が好純是之又是る同伴の両少年は武
者修行の為此の地ふ来り大江杜四郎成勝峯張茶六郎通能是之と名告
杜四郎も俱のふら俺は比城内に衆少年の試撃の折我股挿の刀
ふ附る家室の小柄を覆ひて高嶋主と相謀りて夜々市小涉獨程
小方僅這頭を過りてこの盗兒金九郎も最小の刀を握持り
是の門内より走り物を心ともあり見てけり遣も過きを搦捕て其事

考責問ふ這奴の枸杞村なる古人留守七の獨子ゆへ金九郎と喚
做を五人ある夏も俺刀子を竊會するも招了らざりて知らざりて其
刀子の立地ふり復して茲に在りと告ぐ茶六其語を次て介する件の刀
子ゆへ這奴が夜中血の塗れぬ故ありぬと思ふをのれ猶も緊しく責
問ふ這家主人吾足齋不怨ありて口論の折痕を負せりて其の信
くければ事の実を知りて為の奴を牽りて来つるれといふ老母の涙を斂
る件の三士小向ひてゆへ奴家の老母と喚する吾足齋の妻ゆへはり
今日も良人の病架招れて更闌まよる来也折々兩個の盗兒あり
其一個は我夫の賄祿の所を豫知りけん納戸小入りて財囊を引提て背戸の方
をを見ゆへ往方を知ると又一個の盗兒は女兒晚船を搦攫ひて玄園の方へ去り
を奴家の楚と認めぬも其折良人のより来て所戦ふて親も女兒も俱に深瘻ふ

息絶す欲開の何ものけん知しむけり。と告ふ石見も杜四郎も米六も俱小點頭て
 それを皆亮奪取り。何を金九郎吾足齋と晩縮とを斫殺しける顛末
 を招きせむ。責問の金九郎頼むことを踏まらぬ陳を今何事をと悪
 きつた。今日も彼未朱之收が我拘把村の宿所に来て密中相譚ふや。乾父
 吾足が各先拘神の價百金を今渡さぬの事と云ふ。実母を喰ひて
 手実を引裂捨られし。今宵家内小潛入りて喰ひぬ。
 涯りの金銀をりのせん。汝の晩縮の布囊を樹せ肩駝せし。咱又彼
 少女の死あり。利得の金の等分と憑きし。心惑ひて俱小納戸小潛入りて
 朱之收の那這と撈りて財囊を引取り。已の晩縮の布囊を樹せて脚を
 繫り縛りて肩から載て去るを。主人あるが。来ぬ。女園の頭小
 て盗見入りぬと思ひけん。罵咄めく刀を抜き。轆んと抜む。野干玉の間

小紛として少女を盾に受し。刃尖憐む。少女の深痕も彼人の違ひぬ。欲
 と思ひけん。焼むを治し。と懐ある。刀子をぬき。彼人の服腹馬熱と刺し
 て。角門より逃去す。折殿們小撞見ふ。搦捕して。今さう後悔別小仔細ハ
 ひつむと。招了分明ありけん。阿夏の老芋の羞る色あり。又石見女等
 ふうち向ひて。如流の今宵の禍事。我子とわんも耻し人小入て人
 るぬ。朱之收の思心より。這金九郎さ。荷擔して。丈夫も女兒も横死の折殿連
 の出来事して。方も去らば我冤家を搦捕せし。小の歎治の中の飲ひあり。と
 いふ。同小隣家の主人も。我女を俱小の。小可の合壁あり。客店の主人も。て
 津同屋集三即是。嚮小這女房が慌忙し。喚聲あり。指して。小厨
 等を於て走來ぬ。甲斐も。早盗見等の逃亡て。吾足と女兒の横死を知
 るの。相応し。御用も。素りぬ。仰付らるるや。といふ。同小石見女

身を起しつゝ吾足齋と晩縮の金瘡を得と見て杜四郎等示して公
 卿大江峯張是見ゆへ晩縮とやんへ深痕あて胆胃の二經断絶され
 ば左ても右ても生べらむも吾足齋へ刺瘡あて亦必死の深痕あて
 ども鳩尾猶温ゆへす口の脈あふ似たり抑我家昔より仙傳不思議の
 神藥あり約莫刀瘡あて死する者いふ三日を経てもあふ其茶を
 用ふる一旦甦生せざる者あり。縱令其命長くも或は後夏を辨し
 或はよく遺言する者見孫の爲小裨益あり。只頭を撃落されし者と五臟
 を破られたる者其效驗あること正は是軍陣必用の奇茶あれば咱等生
 平小腰ゆして今猶茲あり是を以て吾足齋を一要時ありとも活
 飲といふ四郎も染六も俱小感悦大に奇妙あり仁術と云ふべし
 いと云ふ石見必取還凝せむ則老亭と集三あり云々と宣示を相らるる

身を起し集三一條の布を索ねて来て吾足齋の瘡口を三四重
 楚と纏程小老亭へ茶碗小最清の水を汲合ひて来て来ゆけり當下石
 見女へ腰小吊する茶籠を啓て彼仙丹を吾足齋の口中小推入て
 件の水を灑下せば津向屋主僕へ吾足齋を抱起し老亭も俱小聲を合
 して喃々と呼活ること半响許其聲やや耳小入りけん吾足齋の忽然と
 眼を睜り左見右見て原来俺身死しり欬といふ老亭へ欬しと云ふ
 推り附く喃我快心地正可小做りぬ欬今宵おん身小痰を負せしる
 冤家へ枸杞村の金九ありと這殿達小搦捕して牽れて今猶茲在り
 晩縮の横死おん身の怨親の又小身を果する事の起り朱之公拘神の
 價百金の空小ありと怨をけん金九郎と伴ふて子二刻の時候潜ひ来て
 身小納戸小秘置するひ。財囊を奪ふて逃去りぬ晩縮の上ハ箇様々おん身

の甦生の茲そせいは茲いまは高嶋大人たかじまおとなの御庇ごひを仙傳せんでん奇特きとくの神藥かみやくの即效ちやくちやくふよを
 付つて告つぐと告つぐと領りやうく吾足齋ごそくしやうへ憶おぼつとも嗟嘆さたんする形貌かたちを改あらため膝組直ひざぐみただし
 て石見いし見の謝あやまりてのやう。告つぐと面おもての事ことも又また是後このちの誠まことふ做なす
 あんを俺おれ渾家むんけも人々ひとびとも听きく。誠まことふ善惡ぜんあく応報おんぱうの終つひに脱だつとる理ことりを。
 物の本もとの字あしとあまべ。孰たゞも知しりたるまゝさう。怨うらみの惑まどふ思おもひも出いでる人
 我わが凡夫ぼんぷの愚おろさ蓋當かきあ夏なつ晚ゆふ稻いねの悪瘡あくそう療藥りやうやく術じゆつ計けい盡じんし折住せぢゆ吉きちの神王かみわうの
 家いへふ其藥そのやくありとばえ。二伏ふたひの日の暑あつも最もつと我身わがみ那里なれふ尋たづねた。薬方やくぱう
 をの傳でん授じゆせられて拘神くしん一枚まい用もちひる。即效ちやくちやく疑うたがひぬたの。但ただし拘神くしんへ和漢わかん小稀せうき
 あり。價あひ百金ひやくきんありとせむ。ゆさうんとの思おもひ。奇方きぱうをゆさう。嬉うれしけれど。
 俺おれふ百金ひやくきんの貯たくわえあり。しうふをたと思おもひ難がたく旅宿りよしゆくへ夕月ゆふづき夜住よぢゆの郷きやうを
 距さること十町じゆちやうをりる。路みちを過する程ほどふと見みると去いる向むかふ兩個ふたごの少年せうねん一箇ひとの

財囊さいのふを争あへ挑戦てんせんふ程ほどとあれ。月額げつがくの迹あと最長さいちやうに一人ひとりへ竟つひに勝かちを
 ありけん。持もちする財囊さいのふを捉とられし。後方あき迫せまふ投遣なげぢり。折せりく照てる月つき
 雲くも隠かくして。膝ひざ臈らふと做なす。隨まつ俺おれ竊窺せうせうてなり。はがた拘神くしんありと
 ても。そを買かひ合あひ。百金ひやくきんあり。何なにをりて本意ほんいを遂とげ。那財囊あのさいのふの重おもや
 る。投なげらる。時とき大地だいちふ応おて音ねせ。ふより推量おしりやうする。東西とうせいを知ら。死し
 の。今いま是こゝも。抹ぬりむ。あ。空そらの山やまふ入いる。手てを空そらま。歸かへる。似に
 たり。嗚呼あゝ。余あれ。身勝手みかたてふ惑まど初はつる。不美ふみの慾よく徐じゆ理り々々と近ちかつ。就つて。件けんの財さい
 囊のふを合あひ。時とき手てふ障さやる。小石せうせき三隻さんしやくあり。當下たうげ俺おれ又またなり。財囊さいのふを這儘このまま
 撥擲はつてひる。他た等らへ必かならず。外ほか人ひとふ奪うばれ。思おもふ。然しかして。今いまより。後々のちも。背せに。さ
 所ところあり。要いふ。とあれ。尋思じんしを。遠とほく。財囊さいのふを因よりて。有あり。圓金えんぎん二囊にのふを。
 天あまの與あつ。懐なつ。楚そと挾くわむ。件けんの小石せうせきの程ほどふ。二隻ふたしやく合あひ。抗かて。開ひらか。儘このまま財囊さいのふ



石見女

りの四郎

ろく六

げん九郎

十六

文治三年

高嶋の仙丹
暫時
吾足齋を活
さ



吾足齋

おいら

つとむ小六

つとむ三郎

つとむ小六

三石童子列傳卷十三

文治三年

入易て手をや、紐を結び、舊外に隠れて竊歩する樹間に入りて又益く
も其首を立去り、当晚浪華の旅館で單孤燈の下に、件の金子を
数ま見ると二百九十五両あり、是れを拘神を講じて、尚八九十金の餘りあり
と思ひ、心づかりて浪華の京左界大津草津の盡處まで、約莫藥店
のあり、涯りをさく、拘神を徴り、小竟亦あり、とあはれ、只得宿所にかつて
來る、俺妻阿夏のお老母の件、金子の實事を告を、這回京の憶りあり、
一舊知已に逢ひ、より、尋、資料をばつ、と、詭示して更み、又その觀音寺
の城下より、枸杞村久礼畑に至るまで、拘神を藏弄する者あり、價百金
買取るべし、との、其美を尋く、書写して、隈もあ、拘示あり、三池の社客
宿六の汲引を、拘神一枚をばけ、且、航て、晚稻の前用、一夜の間の悪
瘡愈て、痕跡あり、とあり、と、俺歡び、知るべ、然、と、其次の日、

宿六の僕、來り、拘神の活玉朱之ぬ、と、對面、及び、おのひ
び、朱某の俺妻老母の實子あり、と、松珠之ぬ、と、面忘る、と、年を
歴、再會の歡び、就て、王張當初、異なる、俺、肚裏、思、と、朱之ぬ、
俺、乾兒、と、晚稻の為、義兄あり、他人、か、今、さ、拘神の價を取ら
ざる、要あり、俺、貯、異、日、亦、晚稻の所縁を、徴、折、衣裳、調度、小、做、を、
と、尋、思、を、朱之ぬ、を、開、儘、留、在、と、敢、拘神の價を、渡、與、と、
其、後、城、内、に、試、撃、の、折、口、も、八、調、手、も、八、挺、ある、朱之ぬ、の、勝利、あり、俺、立、身
の、階、揚、小、做、と、思、ひ、空、憑、と、大江、峯、張、兩、少、年、の、戦、ひ、負、て、
刺、落、馬、の、撲、傷、小、病、卧、と、れ、と、難、と、只、厭、と、思、ひ、と、老、母、其、
子、を、陳、難、と、懲、さん、為、欵、拘神の手實を、無、心、引、拵、棄、と、り、朱之ぬ、の、
親、を、怨、て、告、別、と、と、今、宵、又、人、盆、九、郎、と、共、納、戸、小、潘、入、り、と、彼、一

百九十五金を奪ふて走り去りて金九の晩箱を豪奪して女用より知ん
 ぬ折俺憶り多くその来を問ふ迷ふて撃刀ふ晩箱を害ありのそのを俺身
 も反て金九の為ふ必死の深痕を負ふて縁故原を色情利慾而るら
 猿馬狂ひし俺昨非を君に仕て忠あるを親に仕て孝あるを友に信あり子に
 慈あり果の故郷に住れ他郷の鬼に做すまふ這禍害の野を露の
 命の置け所慾ふ惑へ身の闇に夜ふ人の華ふ財囊の金を撥擲ひり幸ありと
 愛歡ひ罪科を思へ金九朱之心等の竊盜無欺の悪行と相距るあり遠
 うき五十歩百歩といふ多くのを倘他等をも思へ憎ま鄙語ふ云家を抱て
 臭に忘る類ふ似たりと今や悟りぬるも遅くともいふ支毎ふ息吻
 にも實ふ必死と見えたりける這段文尚まけり又下回の解分を聴給り。

新局玉石童子訓卷之十三終



